

---

# 絶対不可侵領域

壱威零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶対不可侵領域

### 【Zマーク】

N4680C

### 【作者名】

壱威零

### 【あらすじ】

研究熱心な母親の失敗により、異世界と現代を行き来する事になった少女 橋野坂玖瑠深。微かな違和感を抱きつつ、母親の話を黙つて聞く事に…。

## プロローグ

### プロローグ

そこそことした陽気と鳥の鳴き声が辺りを包む。

「んう…」

声を漏らした少女は寝返りを打つと皿をひとつと開けた。

「はれつ？」

少女は起き上がり、薄茶色の髪を搔きながら「うー、うー…」と言った。

少女を包むのは暖かな陽気と鳥の囀り。それと、陰鬱な森の空氣だけ。

「訳わからんない」

昨日も定時にベットに入った。いつもと何ら変わりなかつた。だが、いつもと違つ事がひとつだけあつた。それは

「あんまり寝れなかつたなあ～」

少女はふあつと欠伸をした。その途端…

。。。。。。。。。。。。。。。。

どこかで携帯の電子音が聞こえてきた。

少女はポケットを探り、携帯を出してボタンを押した。

「はー」

『あ、<sup>くわい</sup>玖瑠深ちゃん? 私よ、ママよ』

「さよなら」

玖瑠深はそう言いつと、電源を切った。

その数秒後、

ペペペペペペペペペペペペペペ。

「はー」

『なんで切るのよ、玖瑠深ー!』

「切りたい気分だったから」

そう言いつと、また切るつとする玖瑠深。

『切るなつ、あんた今、大変な事になつてんのよ!』

「大変な事?」

玖瑠深は母親の話を静かに聞く事にした。

## 異界への道

ここは暁の土地、シャングリア。太陽の恵みを一心に浴びる土地だ。

町人が一斉に動き始める午前9時。城から抜け出したこの国の王子 レイン・シャールは町人の格好に身をやつし、市場を歩いていた。

ある場所に来たレインは目深に被つていたフードを外すと「イルアラ～。スリア～」と叫んだ。

「あんた、また来たの？」

腰に手を当て、そう言つたのは姉のイルアラ・カート。

「あ、レインだあ。いらっしゃ～い」

白兎のぬいぐるみを抱え、気の抜けるような笑みを浮かぶて言つたのは妹のスリア・カート。

「『また』とは』挨拶だなあ』

レインはやうやく「今日は お客として来たのに」と言つた。

「客？」

「そう。占い師姉妹 カート姉妹の力を借りたくてね」

レインは妖しく笑つた。

木々の隙間から太陽の光が入ってくる。玖瑠深は携帯片手に颯爽と歩いていた。その顔は険しく、まるで般若のようだ。

明らかに不機嫌。腹をたててている。

「あ～の～女～！」<sup>アマ</sup>

玖瑠深の不機嫌の原因は数分前に遡る。

「大変な事つて何？」

『い～い？心して聞くのよ、玖瑠深』

「さつさと話せ

『「ホンシ。」つめ～ん、玖瑠深ちゃん。またママの研究失敗しちやつたの』

「また～～～！？」

玖瑠深の母 奈美はとても研究熱心なのだが、いつもいつもその苦労が徒労に終わってしまう。

家屋破壊も数知れず。とうとうキレた父親が研究室もとい、追い出し部屋を作るくらいだ。

「それで？お母さんの失敗とボクがここにいるのどう関係があるのさ」

『ママが研究してたモノね。機械だったの。壊れかけの。買い物帰りに拾つてね。見たことない機械だったものだからつい分解しちゃつて……。』

「戻せなくなつたと」

『 そうなのよ～！しかもその機械、いきなり喋つたの！ 『セカイ…』  
… ハワレル。『ハ、ホツス』って』

「ふ～ん」

玖瑠深は興味がないのか、肩くらいままである茶色の髪に指を絡め、弄りながら答えた。

『 その機械、こつも言つたの。『ハ、キマッテル…。ハ、ヒノサカ、クル、ミ』って。そういう言つた途端、機械と同時に玖瑠深ちゃんの部屋から光が溢れてて』

「 その 賛 にボクが選ばれたって訳か。って信じられるかあ～～～！」

いきなりキレた玖瑠深。無い筈のつけがねをひっくり返している。

「 もう切る。バイバイッ」

『 あ、玖瑠深ちや』

。バッ。

と、いう訳だ。

「 何が『と、いう訳』じゃあ～～～…」

「 誰だつ～～～」

予期せぬ声に玖瑠深はビクッと体を揺らし、その場に止まった。

## 深い森

「そこにあるのは誰だっ！」

森に大きく響く声。

玖瑠深は一切の動きを止めた。この場から逃げ出したい欲求はあるのだが、足が竦んで動かないのだ。

ガサガサッと木々が揺れ、銀色の髪に紅の瞳を持つ少年が出てきた。

「人間の、女？」

少年はそう言つと、右手に構えていた三つ叉の槍を一振りし、掌サイズに縮めた。

「どうしてこんな所にいる、女。」  
「はオレ達の一族だけが入る事を許された土地だ」

「いや、どうしてって言われても、  
『氣づいたらここに

頭を掻きながら答える玖瑠深。

「氣づいたら？」

「うん」

少年は掌サイズに縮めた槍を一振りし元に戻すと、玖瑠深の首に当てた。

「嘘を吐くな。この土地はオレ達以外には入れない。どこの國の回し者だ」

「嘘じやないって言つてるで……しおつ！」

玖瑠深は体を後ろにやりながら少年に足払いをかけた。

「くつ！」

少年は地面に手をつき、体制を整えると玖瑠深は睨みつけた。

「そんな顔されても怖くないし〜」

玖瑠深はくすくすと笑う。

少年は玖瑠深から視線を外さずに立つと、能面のような何の感情も伺えない顔を玖瑠深に向けた。

「女、名前はなんだ？」

「『人に名前を聞く時はまず自分の名を名乗れ』」

玖瑠深は少年を指差すと「君が名乗ってくれないならボクが名乗る必要はないよ」と言つた。

少年はしばらくその指を見ていたのだが、何かに気づいたかのように長いため息を吐いた。

「エリシオ・ウランクイナ」

「エリシオね。ボクは樋野坂玖瑠深」

「ヒノサカ、クルミ？ファーストネームが『ヒノサカ』か？変な名前だな」

「ああ違う違う。『玖瑠深』がファーストネーム。『樋野坂』はファミリーネーム。OK？」

「ああ」

少年 エリシオ・ウランクイナは、三つ叉の槍を一振りし掌サイズ

に縮めた。

「伝聞、眞実、噂、異世界」

エリシオは繫がらない言葉をいくつか言つと玖瑠深を見た。

「世界、贊、森、女…」

エリシオは玖瑠深の腕を掴むと「来い」と言い、腕を引っ張った。

「来いつてビリーハー！？」

引っ張られる力により前に進むのめりきりになりながらも玖瑠深は  
聞いた。

その問いにエリシオは答えた。

「オレの国だ」

と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4680c/>

---

絶対不可侵領域

2010年10月13日04時37分発行